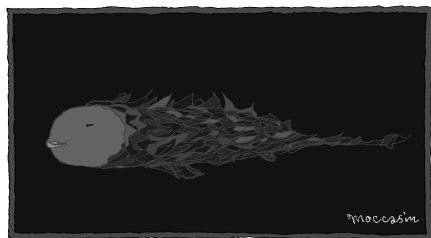


3
モカシンの深海魚



この前、美術館に行ったのはいつだったろう。

記憶にない。

絵を観^みるのは好きだった。だから、昔はもっと積極的に出かけて行ったものだ。いつから、行かなくなってしまったのだろう。

たぶん、余裕がなくなったのだ。

「余裕」という言葉が適切でないとしたら、「余白」と言った方がいいかもしれない。それは、色が塗り残されて余ったところ、という意味ではなく、まだ足を踏み入れていない、これからどうにでもなる可能性としての余白だ。

そんな余白を見失ってしまったということは、自分にはすでに可能性が残されていないということかとだろうか。

いや、悲観するのはやめよう。

なにしろ、十七歳の自分に会いに行くのだ。

もし、思わず番組で口走ってしまった記憶と、

それに応^{こた}えてくださったりスナーのお話がびたりと重なっているなら、これから出向く美術館に、十七歳の自分が描かれたあの絵が飾られていることになる。

半信半疑ではあった。

長いあいだ、絵のことは忘れていたし、僕の顔はいたって特徴のない平凡な顔だ。自分によく似た人が三人どころか三十人ぐらいいるのではないかと思われる。

だから、他人の空似ということも大いに考えられ、そもそも、こうしたことは、そう簡単に結びつかないものだ。いつからか、そう思っている。

が――、

(それは分かりませんよ)

胸の中に眠っているベニーがひさしぶりに話しかけてきた。

(うまくいかないことがつづいていたらなら、そろそろ、うまくいくかもしれません)

ありがとう、ベニー。

そう思うことにするよ。

それに、もし、その絵が、多々^たさんが描いてくれたあの絵でなかったとしても、僕にはたぶん、絵を観る時間のようなものが必要なだろう。

その証拠に、教わった美術館のエントランスに辿^{たど}り着くと、それだけでもう、「余白」の快さに、こわばっていたものがゆるゆるとほどけた。

美術館は想像していたより広く、余白という言葉葉を用いるのがふさわしい、ゆったりとした空間だった。しかし、そうした豊かさに触れた途端、すぐに、自分の思惑が打ち砕かれることになった。エントランスの一角に、ごく控えめに美術館の名前が刻まれた銘板があり、そのまま右手に視線を移すと、これもまた目立たない地味な配色による小ぶりのポスターが掲示されていた。

〈ポール・モカシン回顧展〉とある。

ポール・モカシン？

モカシンというのは、あの靴の名のモカシンだろうか。我が楽団の要^{かなめ}——ピアノの新田^{にった}さんはモカシンの愛好家で、僕が知る限り、全シーズンを通して、モカシン以外の靴を履いているのを二度

しか見たことがない。一度目は父の通夜で、二度目は父の告別式だった。その二度を除けば、新田さんと新田さんのモカシンは分かち難いひとつのものになっていた。

だから、もし新田さんにニックネームをつけるとしたら、「新田モカシン」で決まりだ。このポール・モカシンなる耳慣れない名前も、あるいは本名ではなく、モカシン好きが高じて、自ら名乗ったペンネームの類たぐいであるかもしれない。

いずれにしても、おそらく——というか確実に外国の画家であり、どう考えても、多々さんの作品が入り込む余地はないようだった。

もう少し、しっかり調べてくればよかったのだろう。それは分かっている。一応、ウェブ上の情報をざっと見たのだが、パソコンの画面の中で結果を知ってしまうのが惜しいような気がしたのだ。心が躍っていたからである。

こんなこともまた、いつ以来だろう。記憶を探ってみても、すぐには見つからない。

初めて、クラリネットを吹いたときか？

まさか、そんなところまでさかのぼるだろうか。何であれ、そこには自分の知らない世界が広がっていて、「心が躍る」と言いたくなるときに手にした何ごとかは、一台のクラリネットであったり、一度も行ったことのない美術館の住所であったりする。でも、その奥に未知のものがいくつも連なっているのだ。自らの無知や経験不足を恥じ、わずかながらでも謙虚な気持ちになることで、未知のパースペクティブがはかり知れない奥行きを備えるように思う。

とにかく、僕は十七歳の自分が描かれたあの絵と再会できるかもしれないという、思いがけない事態に心が躍っていた。だから、インターネットを通して美術館の展示情報を知り、そこに多々さんの名前が見つからなかったときの落胆を椅子いすに座ったまま完結させたくなかった。

どうせなら、美術館まで赴き、そうした徒労を経た上で、（やはり違ったか）と肩を落とす方が本物の落胆を味わえる。

（やはり違ったか）

そうした予感があったのは否めない。

が、それを上まわる胸の高鳴りがあったのもまた否めなかった。

それに、自分がここまで来てしまったのは、この展示がすでに六ヶ月にわたってつづいていたからで、リスナーの「半年ほど前に」という言葉と照らし合わせると、いま展示している作品の中に、自分によく似た肖像画があるのではないかと安易に思い込んでいた。

しかし、いざ、展示の詳細を目の当たりにしてみると、どう考えても、多々さんのあの絵が展示されている可能性は低い。

首を振って肩をすくめた。

(それは分かりませんよ)

ベニーの声が胸の中でリフレインする。

そうだね、ベニー。せっかく、ここまで来たのだから、この「余白」を楽しまない手はない。むしろ、いまの自分に必要なのは、「余白」を味わう時間で、十七歳の自分に再会するというのは感傷的なおまけに過ぎない。

純粹に美術館で絵を観る喜びを味わおう。

静かなエントランスを抜け、静かなチケット売り場で質素な入場券を買った。まったくと言っていいほど音のしないロビーだ。

自分の他には誰もいない。こんなことはいつ以来だろう。

窓から射し込む陽の光がほどよく、このたったいまの瞬間を自分だけが経験している勿体なさを、どう表現したらいいのか――。

いや、「余白」の時間はもういい。

ロビーの隅に置かれた「順路」の看板に従おう。ロビーの明るさが「順路」の立て看板の先の通路を進むにつれて絞られ、その細い通路の天井に埋め込まれたダウンライトはきわめて淡かった。

急に暗さに飲み込まれた感じがする。

通路はすぐに直角に折れ、右手にあらわれた黒い壁にダウンライトとは別のスポットライトがあたっていた。その光の中に、画家の――すなわち、ポール・モカシン氏の紹介文が浮かんでいた。

ポール・モカシン 1967—2010

出生地は不明で、「北の方の海の近く」と自らは語っている。父親の転勤で「都会」へ移り、たまたま画材店でアルバイトを始めたのがきっかけで、絵を描き始めた。題材は幼少期の記憶をもとにした海や、海からイメージされた抽象的な世界に限定されている。

とりわけ、画家の想像力は深海のさらなる深みにまで至り、空想上の名もない深海魚をモチーフにした作品を数多く残した。

これを読んで、さらに周囲が暗くなったような気がした。紹介文の情報の少なさによるものか。まだ一枚も絵を観ていないのに、館内の空気がひんやりとして、深海よりもさらに深いところへ連れ去られた感じがした。

それは、「順路」に従って進み、最初の展示エリアに足を踏み入れて決定的になった。

もちろん、美術館の学芸員は画家の作風に沿っ

た展示を試みているのだらうけれど、それにしても、展示室の暗さが独特だった。そこはまさに「深海のさらなる深み」を思わせ、暗さに目が慣れない、うちは壁がどこにあるのかも分からなかった。ただ、壁おほと思しきところには作品が飾られているので、最初のうちは壁に飾られた絵を眺めるというより、絵を追っていくことで壁の存在を認めることになった。

しかも、作品はいずれもこちらの視線より幾分か低い位置に展示されていて、それもまた画家の意向に沿ったものなのか、この世のいちばん深いところにそれらの深海魚が棲息せいそくしているのだと、絵に添えられた説明を読まなくても伝わってきた。そもそも、そうした説明が絵に添えられているのかどうか分からない。が、そのうち、暗さに目が慣れてくると、通常の展示がそうであるように、一点一点、説明があり、どの絵にも題名が与えられていないことも分かった。

「名もない深海魚」というのはそういう意味でもあるようで、（なるほど）と了解してしまおうと、

描かれたものを鑑賞するのではなく、ただそこに名もない魚たちが息をひそめているのだと信じられた。

いや、正しくは、信じられたのではなく騙だまされているのだが、ひとつひとつの絵を鑑賞する前に、展示室の全体をそうして俯瞰ふかんする時間が心地よかった。

最初の驚きが落ちつくと、海の深いところへ穏やかに降り立った気分になり、あらためて魚たちを見直してみると、画家の描写はじつにきめ細かく、とても空想上のものとは思えなかった。画家だけが誰よりも深く海の底に到達し、そこで出会った魚たちの姿を写真におさめるよりも適確とらに捉えている——そんなふうに見えた。

絵の背景の深海と、展示室の空気が境目なく溶け合っていて、それは画家の技術だけではなく、この展示を形にしたスタッフの力でもあるだろう。やはり、美術館から遠ざかってはいけない。

たとえば、過去に存分に通った経験があるとしても、こうした時間を過ごすことは繰り返される日

常の中に組み込まれているからこそ意味がある。

(そうだ、今日はあの店でハンバーガーを食べよう)

空腹によって自然とそう思うように、こうした時間をもとめる思いにもっと潤いを与えるべきなのだ。

反省しつつ、「順路」に促されて次の展示室に入ると、そこは先の展示室よりほんやりとした明るさをたたえた空間で、わずかながら広さも拡張し、描かれた魚たちも、それなりの体長を持っていた。

説明が見当たらないので、正確なところは不明だが、もしかして、最初の展示室より海の深さが一段階、浅くなったのだろうか。最初の展示室が低音によって奏でられた序奏であったとすれば、その空間にはあきらかにメロディーの気配があった。

もちろん、これは僕が楽器を操るからそう感じるのだろうか、なんとというか、描かれた魚たちが、

こちらへ話しかけてくるように思えた。

これは、メロディーというものの特性を考えるいい機会でもある。

メロディーは、たとえそこに歌詞が付いていなかったとしても、誰かに何かを伝えようとしている意志が感じられる。メロディーを奏でることは言葉を奏でることに等しく、そこにもれなく何かが立ち上がってくる。

僕はポール・モカシンという人がどのような人物で、どのように生きて、どのような絵を描きつづけてきたのか知らない。

ましてや、海の底に生きる魚たちが、どんな言葉を交わしているのかも知らない。

でも、その展示室の静寂の中に、つぶやきにも似たいくつもの声が魚たちから伝わってきた。何を言っているのか分からないとしても、彼らは皆、何かをこちらに伝えようとしている。

だから、僕はそのメロディーに耳を傾けた。
メロディーとは、きつとそういうものだ。

そういえば、父がよく言っていた。

「音符をなぞるだけでは駄目だ。楽譜のことは忘れて、たったいま自分が思いついたことを誰かに伝えるように奏でるといい」

そうすれば、たとえ、楽譜どおりの旋律でなくとも、メロディーが伝えようとしていることは、その音を聴いた者に伝わるはず——。

長らく演奏をしてきて、父の言葉の意味を理解する瞬間が何度かあった。でも、こうして絵を観たことで音楽を連想し、音楽を聴いたり奏でたときと同じような感慨を得るのは初めてだった。

三つ目の展示室は、さらにもう一段階、明るさが増していて、やはり、海のいちばん深いところから、少しずつ海面へ向かって階層が上がっているようだった。その上昇に従って、展示室の壁の存在もはつきりし、絵の背景の色合いも壁の色に合わせたみたいに明るさが増していた。その結果、魚たちは絵の中から抜け出し、展示室の空間を自由に泳ぎまわっているように見える。

画家の意図がどうであったかは分からない。紹介文を読む限り、すでに亡くなっているのだから、この展示に画家の思惑が反映されているとも思えない。

ただ、三つの段階を経て感じたのは、最初に序奏があり、次にAメロがあり、そして、この三つ目の空間は次のブロックへの橋渡し——ブリッジであるように思えた。

これは、音楽にたとえて考えるからそうなるのではなく、展示に仕掛けられた演出ではないかと、ここへ来てようやく察知した。

当然だが、観客の誰もが音楽を連想するはずはなく、そうした連想がなくても、暗から明への移行が展示によって表現されていることは分かる。となると、音楽で言えば、次にサビが来てもおかしくない。

ここでまた、サビとはなんだろう、などと考えるのは野暮な話だ。

実際、その三つ目の展示室では、より広い、より明るい空間へと抜け出て行こうとする魚たちの

意志が感じられ、次の四つ目の展示室への期待と
いうか、予感のようなものが、こちらの体の中に
——胸のあたりから喉のどもとへかけてせり上がって
いた。

そうした憶測が間違いでないと分かったのは、
三つ目の展示室から次の部屋へ移るときに前髪が
風にあおられたような感覚があったからだ。部屋
の中の空気が変わり、それまでの流れがすべてこ
こへ辿り着くために用意されていたのだと了解し
た——。

そこはとてもし大きな展示室だった。

外から見たときは、この美術館の中にここまで
大きな空間が隠されているとは思ってもよらない。
寺院で言えば、大伽藍だいがらんに身を置いたようで、突然、
宇宙へ放り出されたような心もとなさを伴ってい
た。

それは、そこにまったく予想外だった巨大な絵
が展示されていたからで、ちょっとした倉庫を思

わせる空間の左手の壁一面に、輝くように真つ白な鯨の姿があった。

いや、真つ白に見えたのは暗く狭い空間から抜け出てきたからそう思うのであり、圧倒されながらも見上げるように確かめると、それはただ白いのではなく、それこそ何人もの声が重ねられたコーラスを思わせる、何色とも言えない色の深さがあった。

透明なようできて重厚であり、水晶でつくられたようでありながら、こちらへ重くのしかかってくる恐ろしいばかりの質量が感じられた。

観ているうちに時間がなくなっていく。

この鯨は時間を飲み込んでいるのだ。時間を食って生きている。

だから、僕は最初、惚けたように口をあけてその巨大な絵を眺めていたのだけれど、それから一体、どれほどの時間が流れたのか、憶測を言うこともできなくなった。

時間が消えていた。

そうだ。それが音楽とのいちばんの違いだ。

音楽には時間がある。時間の推移を利用しているとも言える。

でも、絵には時間がない。

時間から抜け出して自由になれば、所在はなくなり、所在がなくなれば、この鯨はどこにでもいることになる。

まったく神のようなものだ。

そして、神のようなものは、いつでも怪物のように見える。

そこへ至るまでに観た絵も忘れ難い印象をもたらし、偶然、見ることになった作品だったが、この時間を自分はずっと忘れずにいるだろうと考えていた。

でも、この鯨の絵をこうして浴びるように体験してしまうと、これはもはや作品でも絵でもなく、「この時間」と示すことさえできなくなった。言葉は無効というより無用になっていく。

鯨がそう言っているようにも感じられたし、鯨は言葉などひとつも発しないのだとも思えた。

奇妙なのは、この鯨の存在を自分は生まれる前から知っていたような気がすることで、素晴らしき音楽を聴いたときに同じような思いになることがある。生まれる前から知っていたというのは理屈が通らないし、それでも、そう言いたくなるのは、その瞬間だけ神秘を体感しているからだろう。

音楽をつづけてきたのは、父に近づきたいという思いもあったけれど、もしかすると、その神秘的な一瞬を背筋の震えとともに忘れずにいたかったからかもしれない。

時間の感覚がなくなってしまうと、その絵をずっと見ていたいという思いからも解放されるのが分かった。

もし、本当に生まれる前からこの鯨を知っているなら、きっと自分の中にそれは居座っているわけで、たまたま、思いもよらないかたちで出会ったこの絵が、自分の中に眠っていたものを呼び覚ましたのだとも言える。

(そうだと思います)

胸の奥からベニーの声が聞こえた。

どのくらい時間が経っていたのか分からないが、それで僕はようやく鯨に背を向けて、その展示室を出た。

しかし、その先にはもう「順路」の表示がなく、音楽で言うところの間奏やCメロといったものは用意されていなかった。サビがクライマックスであり、そこで展示が閉じられるというのも、当たり前といえれば当たり前の話だ。

「順路」の代わりに「出口」の表示が目にとまり、足はそちらに向きかけたが、もうひとつ、それとは別に「常設展」という表示があるのに気がついた。

「出口」とは反対の方向に矢印が向いている。

足がとまった。

鯨に圧倒されて時間を見失ってしまふほど頭の中が真っ白になってしまったが、そうだ、自分がここへ来たのは鯨に会うためではなく、十七歳の自分と再会するためだったと頭の中の何かが元ど

おりに動き出した。

目を細めて「常設展」の表示の先を見る。

そこにはまた、深海へつながる細くて暗い通路がつづいているようだった。